

三重大での 29 年半を振り返って

早瀬 光秋

私は 1990（平成 2）年 10 月 1 日に三重大に赴任しました。関西外国語大学で教鞭をとっていた時、三重大教育学部英語科の「英語教育」担当教員の募集があり、それに応募したのです。実は関西外大は母校であり、学部第 3 期生、大学院修士課程第 1 期生でもあり、このまま母校で教え続けるものと思っていました。しかしながら、三重大は国立大学であり、英語科の学生数が関西外大に比べると格段に少ないこと——関西外大では 120 人に対して英文法を講義したこともありましたが——、英語教育という専門分野で研究・教育ができることに、大変強い興味を持ち、応募しました。大学院構想があることも大きな一因でした。

三重大での担当授業は、基本的に必修科目、選択科目とも、それぞれの学年の学生及び他専攻生が受講生で、どのクラスも 15 人前後の熱心な学生で構成されており、とても遣り甲斐を感じました。赴任後しばらくの間は、授業準備等のため週末の土曜日と日曜日にも研究室に出てきました。休憩時に海岸まで散歩し、大阪では見ることのできなかつた海を見て気分を解したこともありました。

また 1996 年から 2004 年まで、立教大学の小林悦雄先生（英語担当）と長島忍先生（情報科学担当）の 3 人で、3 年間ずつ計 3 つの科研費を受け、「コンピュータ間での、リスニングテスト教材送付による遠隔地学習支援の研究」等を行いました。そして、その研究成果を発表するために、日本国内での学会はもとより、米国、韓国、アイルランド、ロシア、ブルガリア、フィンランドにも足を運んだことが今となっては良い思い出です。

三重大は長い間ミシガン州立大学と協定を結び先方からの教員派遣や、こちらからの夏の語学研修を行っていました。私も 2 回ほど他の先生とともに引率を行いました。学生と同じく学生寮に泊まったのですが、部屋には冷房が無

く、夜大変寝苦しかったことを記憶しています。

また海外といえば、三重大に赴任して間もなく 1991 年の春に、34 日間で南米 6 か国 9 都市を YMCA 関係の任務で訪問しました。南米はブラジル以外の国でスペイン語が公用語であり、関西外大と学部留学先のアーカンソー大学で学んだスペイン語が役にたつことになりました。また、1992 年 4 月からは津市公民館の「スペイン語講座」の講師を、教育学部付属教育実践総合センター長であった 2 年間を除き、現在まで勤めています。英語を授業以外で使用する機会はあまりありませんが、三重県国際交流財団の依頼で、高校の 3 者懇談のスペイン語通訳を年に数回行うことがあります。時間が限られる中、担任の先生も親御さんも発言量が多いので、間違いに気づきながらも、内容だけは正確に伝えるように心がけています。ヨーロッパで言われている「One+2」(母語と 2 つの外国語)に少しでも近づければ、と思っています。

三重大を去るにあたり、とある軍人の言葉 “Old soldiers never die; they just fade away.” にあるように、私なりの方法で勉強を続けていきたいと思います。